吉備国際大学研究紀要
（人文・社会科学系）
第31号，159－167，2021

# 縄遊びにおける保育者の意識の変容

## ―運動会発表に向けた取り組みに焦点をあてて―

近江　望*・中尾　道子**・高田　康史***・白石　智也***

**The Changes in Nursery Teachers' Attitudes about Playing with a Rope: Focusing on the Effort to UNDOKAI**

Nozomu OHMI*, Michiko NAKAO**, Yasufumi TAKATA***, Tomoya SHIRAISHI***

**Abstract**

Playing with a rope is frequently conducted in preschool education and primary education, and research on playing with a rope in preschool education has been conducted in the past. Therefore, the changes in nursery teachers' attitudes about playing with a rope were focused on, and their efforts to the presentation in UNDOKAI examined using the action research method in this study. The subjects of the study were two private nursery teachers. The playing with a rope classes conducted by university faculty in July 2019 and the reflection meetings were held with two teachers. Although these classes were for UNDOKAI, they were also training for two teachers. In addition, interviews were conducted before survey and after UNDOKAI to explore the changes in each teacher's attitudes of playing with a rope. The reflection meetings and the interviews were analyzed. As a result, two teachers showed different changes in their attitudes: one teacher had more questions about the exercise environment and teaching strategy, and the other suggested effective teaching methods. In this practice, certain results were achieved. In UNDOKAI, however, it was difficult to show the children's activities that are in daily life because UNDOKAI is recognized as a place to present the outcomes of children's work. In order to make changes in this custom, it is necessary to accumulate practices.

**Key words**：Early Childhood Education, Physical Activity, Playing with a Rope, Action Research
**キーワード**：幼少期教育，身体活動，縄跳び，アクションリサーチ

* 吉備国際大学心理学部
〒716-8508　岡山県高梁市伊賀町８
*Kibi International University*
*8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan*（*716-8508*）
** くらしき作陽大学
〒710-0292　岡山県倉敷市玉島長尾3515
*Kurashiki Sakuyo University*
*3515, Nagao, Tamashima, Kurashiki, Okayama, Japan*（*710-0292*）
*** 広島文化学園大学人間健康学部
〒731-4312　広島県安芸郡坂町平成ヶ浜３丁目3-20
*Hiroshima Bunka Gakuen University*
*3-3-20, Heiseigahama, Saka, Akigun, Hiroshima, Japan*（*731-4312*）

## 1．はじめに

縄を使った遊びは，幼児教育から小学校教育においてよく行われている運動である。身近にある縄状のものを使いながら手軽に扱えるため，綱引き，しっぽ取り，長縄跳び，短縄跳びなど伝承遊びや運動遊びとして広く認知されている。

幼児教育において縄遊び・縄跳びに関する研究はこれまでも行われているが，その多くは「習得について」[1)]「動作について」[2) 3) 4)]「評価基準作成」[5)]「運動技能獲得時に及ぼす影響」[6)]「動作様式の発達」[7) 8)]など技能の習得に向けた発達についてのものである。

一方，子どもたちに対する指導方法や活動の道筋について研究も見られる。

曽和（1993）は「子どもの管理下で，その時代を反映している歌をともなって，跳び方やルールが子ども達の手で変わってゆくものも伝承遊びのおもしろさである。あまりにも技術指導中心になった縄跳び指導は，幼少期には賛成できない。」として「縄とは人間と切りはなせない不思議な用具である」伝承遊びとしての側面を説いている[9)]。

平井（2018）は幼児教育，保育現場における運動指導の現状を調査したところ，「指導の内容については学校体育で用いられる文部科学省の指針のようなものはなく，それぞれの組織の考えや方針により行われており，統一性はない。」と指摘している。そして，「縄跳びの指導方法が難しくどのような方法で子どもが跳べるようになるのかが分からない」という声に対して「多様性のある内容にして具体的に提示，保育・幼児教育の現場に反映させる」効果的指導方法の研究を行っている[10)]。

三井（2013）は「保育現場において縄跳び遊びの指導の際に，できない部分だけ取り出して頑張らせてしまう指導が行われる」場面から「運動遊びの指導法という研究領域は，『体系的な遊びの指導のあり方についての科学が未開拓な分野』の一つである。」と指摘している[11)]。

三輪（2009）は「現代の子どもの運動の問題を，一般的に取り上げられている体力要素ではなく，いかに新しい動きかたを身につけられるかという発生に基礎を置き，さらに幼児を対象とした長なわとび指導に焦点を当てて考察を進めてきた。」そこでは「どのようなことから始められるのか指導の起点を検討し，さらに指導の道すじを策定した。」そして，「子どもの運動発生における親の果たしている動感促発の役割は，検討されるのにふさわしい価値を有している」としている。しかし，「動感促発できる指導者に必要な身体能力（身体移入能力・共感感化能力）」を「どのように指導者養成課程で計画的に育てていくか，その具体的な方法論が確定されているとはいえない」と指摘している[12)]。

そのため，指導者が子どもの運動への期待や欲求を理解し，それに基づいて指導していく「指導者の運動への意識」は重要な要因となり，これまでも幼児教育や小学校教育現場で指導者の運動への考え方・捉え方の意識調査がされてきた（都築：2017・吉田：2012）[13) 14)]。

しかし，吉田（2012）は「運動指導者による園での指導の在り方を指導内容や指導方法，また指導している内容が保育の中でどう位置付けているか，保育者との連携も含めて見直していく必要があるだろう」と問うている[14)]。

そこで，本研究では技術指導中心の縄跳び指導ではなく，効果的指導方法の研究として子どもの運動発生における指導者の役割を検討していく。そして，その基盤となる指導者の意識に焦点を当て，その変容を探る。

そして，運動遊びの環境設定を工夫しながら，４・５歳児に対する縄遊びの教材開発をする実践研究を通して，４・５歳児学級の担任である保育者が教育観をどのように変容していくか検討していくことを目的とした。

本研究の準備段階において園内研究会では新たに縄遊びと表現ダンスの教材を研究して，担任保育者による指導の下，運動会の演技発表につなげていく提案がされた。しかし，これまで担任保育者たちは縄遊びと表現ダンスの発表に向けた指導経験がないため，幼児教育の研究者が園児への指導を通して教材を提案して，まずは保育者の意識の変化に取り組む形となった。そして，教材の改善方法の１つとして授業ごとに指導者と観察者が検討を繰り返すアクションリサーチの手法が有効であると考えた。

## ２．研究方法

### (1) 研究対象と調査方法

2019年７月10日と７月26日に私立Ａ保育園４歳児20名・５歳児14名において行われた縄遊びの実践（全２回）と事後検討会（全２回）を研究対象とした。

今回，４・５歳児クラスに着目した理由としては，毎年９月に実施されている運動会に合同で発表していくことだけでなく，例年，外部からの運動指導員に指導など全て任せていたものを2019年度は４・５歳児担任保育者が担当し，子どもたちの現状を把握した上で指導計画を考えていく変化が求められていたためである。しかし，これまでに縄遊びの指導の経験が乏しい担任保育者のため，本研究により縄遊びの教材研究を行い，２回の実践だけではなく日常の保育の中で子どもの遊びとなり，さらにその成果が運動会発表につながるように計画された。なお，2019年度の運動会発表では縄遊びと表現ダンスの運動を取り入れた作品が披露されたが，本研究では縄遊びの実践に焦点を絞り研究対象としていく。

また，各担任保育者が観察者となり園児の活動を観察することで，教材・指導方法・園児の反応について学ぶ研修の機会になるよう意図的に設定した。

そのため，研究対象である縄遊びの実践（全２回）での指導者は研究者Ｂが行い，担任保育者Ｃ・Ｄは観察者となった。事後検討会（全２回）では園の勤務体制の関係から，担任保育者１人ずつと指導者が振り返りを行う形となった。担任保育者の意見が率直に現れる環境を意識して，教育経験が豊富な指導者の意向が強く影響しないよう指導のねらいや方向性を担任保育者から聞き取る形で事後検討会を進めた。

指導者として実践を行った研究者Ｂは大学教員（男性，教職歴20年）であり，幼児教育の研究者として担任保育者と関わりをもつことで具体的な方法論の促進を期待している。また，事後検討会において担任保育者の思いや考えから課題をみつけ，改善を促す立場であった。

４歳児クラスの担任は，2018年度も４歳児の担任であった担任保育者Ｃ（女性：教職歴６年）であり，これまでの担任経験を振り返りながら熱心に取り組んでいる。

５歳児クラスの担任は初めての５歳児の担任経験となる担任保育者Ｄ（男性：教職歴４年）であり，初めての年長児担任に戸惑いながらも意欲的に取り組んでいる。

調査の方法としては，毎回の実践後，園児の状況や観察の記録をもとに事後検討会を行い，観察者の気づきや意見を中心に教材の可能性を検討するアクションリサーチを実施した。

### (2) 実践内容

実践内容としては，子どもたちにとって縄遊びとしての出会いを大切にするため，縄跳びではなく，まず，縄をくぐり抜ける・縄を扱う・止める運動から取り組むプログラムにより，多様性のある縄遊びから縄跳びへどのように展開していけるのか検討した。

４歳児・５歳児共に第１回目は長縄遊びとして長縄を上下に動かす“踏切遊び”と長縄を回す“走り抜け遊び”に取り組み，縄に当たらない場所や走り抜けられるタイミングを考えた。

４歳児・５歳児共に第２回目は短縄遊びとして短縄

を回す“プロペラ回し”“扇風機回し”や短縄を足に引っ掛ける止め技“鶴のポーズ”短縄を腕に巻きつける“アームラップ”“クロスフリーズ”に取り組み，縄という用具を操作する巧みな動き方を考えた。

### (3) 収集データ

1）園児の状況

・各実践時の映像撮影（指導者と園児の動きや様子などを記録）

2）観察

・観察者による園児の行動や仲間との関わりなどを状況関連的に記述分析したフィールドノーツ

3）指導者・観察者によるリフレクション

・実践後に実施した指導者と観察者による事後検討会の逐語記録

### (4) 実践ごとの検討会

収集したデータを参考に，実践の中で今，何が起こっているのか明らかにし，活動に変化をもたらせていく検討会を各実践後行った。

検討会での用語

(a) 検討会参加者の表記

…観察者（担任保育者C）（担任保育者D）

…指導者（研究者B）

(b) 考察内容からカットしている会話

…逐語記録の中で相づちやうなずき，話題に挙がっている園児の参加者間での確認など検討会の話題に直接関わらない会話

## 3．結果及び考察

### (1) 検討会の過程

1）指導者・観察者によるリフレクションの概要

リフレクションでは観察者（担任保育者C・D）と指導者（研究者B）による議論の部分を取り上げ，担任保育者C・Dの変容を探った。

2）検討会における議論の要点

実践後の検討会は，以下の内容を中心に議論した。

・子どもの様子に関すること
・縄遊びの教材開発に関すること
・指導の環境作りに関すること

また，検討会では担任保育者C・Dが研究者Bと共に縄遊び改善に向けての視点を整理していった。

そこで本研究では，議論の中から担任保育者C・Dの指導観が変容した部分を抽出する。そして，変容の様子に焦点を当て記述する。表2は事後検討会における気づき・意見を整理したものである。

まず，事前に観察者2名のこれまでの縄跳び（縄遊び）経験についてインタビューを行った。2名の担任保育者はいずれも様々な縄跳び(縄遊び)の経験があった。幼児期の縄遊びだけでなく，小・中・高校生活で短縄・長縄（大縄）に取り組んでいた。大学生時代は縄跳び運動をしていない担任保育者Cに対し，担任保育者Dは新しい縄跳び運動（ダブルダッチ）を行っている。担任保育者Cの「楽しい」「マイナス」「頑張って」という心情面での振り返りに対し，担任保育者D

**表1　縄跳び（縄遊び）の経験**

| 担任保育者C | | 担任保育者D |
|---|---|---|
| 縄跳びというよりゴムをつなげてゴム跳び | 幼児 | 2人で縄を持って小指だけ使って通るゲーム |
| 小学校では「縄跳びチャレンジカード」…連続跳びができるようになるまでずっとやっていた思い出<br>縄跳びは楽しいイメージ<br>大縄跳びも楽しいイメージが強い…引っかかった時はマイナスのイメージ<br>基本楽しい思い出…よく頑張って跳んだ記憶 | 小・中・高校 | 部活の練習で長縄…トレーニング<br>リズム感を養う感じ |
| 大学の時…縄跳びだけというのはしていない | 大学 | 大学の時･･･ダブルダッチを一回やった |
| 実習の時…幼稚園に行くと縄跳びをしてみた | | リズム感がわかれば楽しい…リズム感がなくて，ジャンプとか上手じゃない子にはちょっと難しい |

**表２　事後検討会における気づき・意見**

| 担任保育者C | 回 | 担任保育者D |
|---|---|---|
| (1) 子どもたちの様子に関すること | | |
| 当たらない場所があるというところに気づいてやっている子とわからずやっている子が半々ぐらい。 | 1 | 行きたい（やりたい）という子が多かった。難しい子はちょうど良いぐらいの感じ。できる子は「楽勝」みたいな感じ。 |
| あんな使い方をするのはなかなかない，初めての子も多かった。<br>なかなか出来ない子もいた。<br>やってみようとか，楽しそうにやっていた。<br>いろいろ真似をして，自分でいろいろしてはいた。<br>「その子にとってはできている」と思っている。<br>「本当はこうしたらいいんだよ」はいらないんですか。 | 2 | 楽しみにしていた分，跳ばない時点で「じゃあ，もうやらん」ってなった。<br>跳ばしてもらえない，っていう感覚になっている。<br><br>タイミングが欲しい子はいます。<br>跳べないから縄跳びしたくないということになっている。 |
| (2) 縄跳びの教材開発に関すること | | |
| 跳ぶという意識よりか縄に慣れていろんな遊び方ができる。<br>いろいろな使い方があるっていうところの学びができた。<br><br>「縄跳びを最終的に跳ぶ」ところにつなげる導入になる。 | 1 | 跳ばないことで苦手意識を持たないようにする。<br>縄跳びが難しいものではない，というのを子どもたちに伝える。<br>リズム感を教えるっていうか，自然にリズムがわかる。<br>自分たちでリズムを感じながら，自分たちで一歩を踏み出す。<br>自分たちで自分たちのリズムを理解した上で行ける。<br>苦手意識を持たせないこととリズム感をねらいにした。<br>止めて「縄がこうなっているよね」というのはすごくわかりやすかった。<br>支援の必要な子はそれを見せても，空間の理解は難しい。 |
| とにかく縄を跳ばずにいろいろなやり方で縄と遊んでみる，体を動かして遊んでみる。<br>見よう見まねでしてみる子が結構多かったので，そこに気づける子は本当に数人。<br>ちょっと言ってあげないと，どうやったら巻きつくかとか分からない子の方が多かった。<br>今の４歳児には難しかったのかな，と思います。<br>できたと思っている子に関してはそのまま好きにしてもらう。<br>最終的に運動会にするならちょっと。 | 2 | どこまでできるんかな，どこまでの人数がどこまでついてこれるか見ている感じ。<br><br>別に跳ぶなら跳ぶでもいいかな，と。<br>短縄に興味を持ち始めているところで「縄跳ばない」から「私は跳びたいんだけど」。 |
| (3) 指導の環境作りに関すること | | |
| 跳ぶ子はやっぱり跳ぶし，好きで。途中から挑戦する子もいる。<br>跳びたい子はずっと跳ばしていたらいいですか。<br><br>八の字も通り抜けなんですか。<br>通り抜けもここの空間を通ったらいいのですか。<br>通り抜けって，こっちの人はここを通るってことですか。<br>八の字（は）ここ通るけど，真ん中らへんを通り抜ける，ってことですか。 | 1 | 一緒にとか。タイミングを体で，手をつないで行くとかしたら覚えやすいと思いますね。<br>跳べんかった子が「一緒にやろうや」っていう子もいたんで。 |
| やり方を理解してできている子に「こうしたほうがカッコよくできるよ」とか，そういうあれは。<br>その子の中で「できた」というと「できた」でいいんですか。<br><br>それをすればいいんですね。 | 2 | 飽きるまでやればいいかな，と。ポーズならポーズを。ポーズを「できたからつまらん」って感じになったら次，という。<br>僕だったらワザと一人だけ教える。<br>「ほんじゃ，みんなに教えてみて」って言う。<br>外側で見ているのを僕らがフォローしつつ，主に教えるのは友だち同士。で，教えることができたら一番。<br>できる子を僕だったら先に呼びますね。<br>「できる人，教えてあげてくれる」って<br>教えあったりして両方できるようになったとか。<br>縄の長さが合っていない。<br>（縄が長いと）止めるときに難しい。<br>（縄が短いと）回しやすくもなりますよね。<br>跳ぶ跳ぶ。元々跳びたいですし。<br>みんな跳んでいます。来る子は跳びます。来ない子は来ない。<br>跳びたくない子もいるんですよ。跳ばない子はそっと抜けるだけなんで。それはそれでいいよ，って。 |

は「リズム感」を挙げており，運動の要素についての気づきを持っていた。

２人の担任保育者共に縄跳び（縄遊び）の経験はあるものの保育者として縄跳び運動を指導した経験についての話は出なかった。自由遊びの時間に縄跳びをする園児に対して支援する場面はあるが，今回のように指導のねらいや方向性を考える経験は初めてとなった。

### (2) 議論の要点

#### １）子どもの様子に関すること

２回の活動を通して，４歳児クラスはなかなか気づかなかったり，出来なかったりするものの自分なりに挑戦している姿が見られた。５歳児クラスも意欲はあり，苦手な子にとってはちょうど良い課題であったが，跳べる子にとっては「跳ばない」課題に対して不満があり，タイミングが合わない子にとっては「跳びたくない」という気持ちになった。担任保育者Ｃからは「こうしたらいい」という支援がどの程度必要なのか，疑問が生まれた。担任保育者Ｄからは跳びたい子と跳べない子の気持ちに気づき，得意な子にとっては「跳ばない」という運動課題が「跳ばしてもらえない」という受け取り方になったことが課題として挙げられた。

#### ２）縄遊びの教材開発に関すること

２回の活動を通して，４歳児クラスでは縄を跳ばなくてもいろいろな使い方があり，しかし，「縄跳びを最終的に跳ぶ」につながる導入という理解が担任保育者Ｃから出た。この点は，担任保育者Ｄからも「苦手意識を持たせないこと」「リズム感」というねらいに対し気づきがあり，どこまでできるか５歳児を見取る活動であったという意見が出た。

４歳児の担任保育者Ｃは「見よう見まねでしてみる子が結構多かったので，そこに気づける子は本当に数人」という見取りがあり，「ちょっと言ってあげないと」という言葉かけの必要性を感じていた。５歳児の担任保育者Ｄは「（縄を）止めて『縄がこうなっているよね』というのはすごくわかりやすかった」という気づきがあったが，一方で「支援の必要な子はそれを見せても，空間の理解は難しい」という課題も挙がり，技術の習得に向けてどのように支援していくのが良いのか悩む姿が見られた。

本研究では，できない部分だけ取り出して頑張らせてしまう指導にならないよう効果的指導方法の研究として子どもの運動発生における指導者の役割を検討していくため指導者は技術指導を最小限に抑えた。そのため，指導の道筋を検討することが大きな課題となった。

#### ３）指導の環境作りに関すること

２回の活動の後，担任保育者による継続的な運動遊びが予定されていることもあり，環境設定についても検討した。担任保育者Ｃからは「跳びたい子はずっと跳ばしていたらいいですか」「通り抜けもここの空間を通ったらいいのですか」「『できた』と言うと『できた』でいいんですか」など指導方法や運動環境について質問が多く出た。担任保育者Ｄからは「タイミングを体で，手をつないで行くとかしたら覚えやすい」「飽きるまでやればいいかな」「僕だったらワザと一人だけ教える」など園児の様子を観察した上で考えた自分なりの指導方法や環境設定が提案された。

#### ４）効果的指導方法に関すること

２回の検討会で教材開発や環境作りを考える中から担任保育者Ｄによる効果的指導方法の提案がされた。「触れてからいく」「体の向き」「友だちとの教え合い」など表３のように授業観察により教材について・指導方法について・園児の反応について自分なりの指導方法が整理されていった。

今回の活動の後，担任保育者による運動遊びによって運動会発表につなげる活動が続くため，今後の指導に生かそうという気づきが生まれた。

#### ５）運動会実施後の振り返りに関すること

２回の活動の後，２ヶ月間の運動遊びを経て2019年９月22日に運動会が実施された。その運動会発表の後

**表３　効果的指導法の提案**

| 授業回 | 担任保育者Ｄ |
|---|---|
| 1 | （縄の）そばにいるとかじゃなくて，僕だったらタッチさせるみたいな。 |
| | 背中や腰らへんを触ってからいく，みたいな。そしたら絶対近くには寄るから。 |
| | あと，向きってあるじゃないですか。腰を触ればこっちには向くと思うんです。こう触りながらたてにこう。 |
| | 自分たちで考えた分。たぶん人（先生）に言われたら逆にわからないと思うんです。<br>（先生に）言われたら「へー」っていう感じだけど，友だちに言われたら「そうなんじゃ。じゃあ，こうしてみよう」みたいな，ってなると思うんです。 |
| 2 | 多分全員に一気に下ろすのではなくて，できる人から下ろしていって，その子が教えて，多分ゆっくりと。下の方の人たちはじっくり見ることが多いんで。 |
| | 僕だったらワザと一人だけ教える。「簡単じゃろ」って言って。<br>「できたらみんなに教えてみて」って「これ簡単なんで」って。ワザと「凄い技できるらしいなあ」とか言って「ちょっとやってみて」って「すごくね」って言って。「ほんじゃ，みんなに教えてみて」って言うと一気にみんなバーっとは来ないんで，というのは「難しそうだな」っていう人は外側で見ていると思うんで，外側で見ているのを僕らがフォローしつつ，主に教えるのは友だち同士。で，教えることができたら一番。 |
| | 子供同士が，やっぱり大人の感覚と子どもの感覚は違うと思うんで。 |
| | そういう部分ができる子を僕だったら先に呼びますね。 |
| | 「できる人，教えてあげてくれる」って。 |
| | もしかしたら，その技はできないけど次の技はできるかもしれない。前のやつはできとったけど，次のはできない，教えあったりして両方できるようになったとか。 |

にインタビューを追加し，その振り返りからそれぞれの担任保育者のその後の変容を探ることとした。

担任保育者Ｃからは今までの段取りが決まった中での活動と異なったため，見通しを持つために指導方法や運動環境について質問が多く出たとの振り返りがあった。

【担任保育者Ｃ】今まではどうしても段取りというか，決まった中で動いていたので担任はもちろん見通しが持てた取組ができるし，今までそうだったので，見通しをもった活動を子どもにやりながらというのは今回の取組ではちょっと違うところだったので，やっぱり子どもが見通しを持てないことは不安なのと一緒で，大人も見通しが持てないと不安なんだな，と感じたところではあった

担任保育者Ｄからは運動会で同じ演目中に披露した表現ダンスに比べて縄跳び運動への保護者の反応が異なった点が挙げられた。

【担任保育者Ｄ】縄跳びはやっぱりその，前もっていろいろ説明してたけど，それを読んでいるかどうかは別にして，やっぱり保護者の理解というか，まだ追いついていないというか，とりあえずその，ダンスの時と比べて盛り上がりがイマイチだったのかな，という感じ

そして，子どもの遊びの中から運動が発生して，その成長を披露する今回のコンセプトに対し，「誰がどう見ても楽しんでいる」姿まで積み上げることが難しかった点が挙げられ，縄跳びの発表はしなくても良い，という意見が出た。

【担任保育者Ｄ】コンセプトの中で「練習して達成する」のも運動会として見栄えがいいと思うんですけど，誰がどう見ても楽しんでいたら周りが保護者とかが見とって，自分の子どもじゃなくても違う保育園の子どもたちでも「めっちゃ楽しそうじゃなあ」ってなったら，もうちょっと盛り上がるんかな，って。だったら縄跳びとかをもし来年もやるんであれば，縄跳びとかは別になくて，表現ダンスを主にして，そこまで練習にこだわるのではなくて，積み上げの中で自分の表現ができるようになっていって最後，表現を自分たちで発表できるようにする，っていう形が一番ベストなのかな

本研究の取り組みからは子どもの運動への期待や欲求を理解し，それに基づいて指導していくことを大切にしたため，運動会の発表演目全体に対しては担任保育者Ｃから「ダンスとか特に，自然な子どもの笑顔や表情を見てもらえたのかな」という感想や，担任保育者Ｄから「ずっと練習してきた中ではスムーズにできたのではないかな」という振り返りがあり，一定の成

果は上がった。しかし,「縄遊び」という技術の到達度がわかりやすい発表に対しては披露していく難しさが最後まで残った形となった。

運動会に向けてはこれまで，見せることを意識した作品作り・集団で揃えていく動き・出来るように取り組む指導などが行われてきており，その部分が欠けている点に不安が出てきた。この点については，運動会の発表を運動遊びの成果とするこれまでの取り組み方と保育者・保護者の意識が垣間みえる。

この課題に対し，担任保育者Ｃは以下のように考えていた。

【担任保育者Ｃ】「それをすることによってどういうところを伸ばしてあげたいのか」とか「保護者の人にこういうところを見てもらいたい」とかそういうことを考えた上で発表につなげた方が「毎年恒例になっているから」というのでするのではなくて,「どうしてこれをするのか」とか目的を今一度考えてみたらいいのではないかと。何も疑問なくされていると思うので

７月の実践では指導方法や運動環境について質問が多く出た担任保育者Ｃであったが，その後２ヶ月間２名の担任保育者で指導のねらいや方向性を考える中から意識の変容が進んだ。

６）まとめ

今回の実践を通し，２名の担任保育者では異なる意見が多く聞かれた。それは,「質問」と「提案」である。担任保育者Ｃからは「～ですか」という指導方法や運動環境について質問が多く出たのに対し，担任保育者Ｄからは「僕だったら」と効果的指導方法の提案がされた。同じ内容の実践であっても運動会発表に向けた取り組みに対し，観察者によって意識の違いが見られた。

しかし，運動会発表に向けた取り組みの中で２ヶ月間２名の担任保育者が指導の在り方を考えることで指導内容や指導方法，また指導している内容を保育の中でどう位置付けているか，保育者同士の連携も含めて見直す機会となった。実践内容に対して受動的であった担任保育者Ｃが「どうしてこれをするのか」と取り組みの目的を考えるなど意識の変容が見られた。

担任保育者Ｄからは子どもの遊びの中から運動が発生するよう指導方法の提案が積極的に行われる姿がみられた。しかし，子どもたちの成長を披露する姿まで積み上げることが難しかった場合，発表を取りやめる意見も出るなど，運動会発表に向けた取り組みへの苦悩が見られた。

運動遊びの学びを発表する場として「運動会」が活用されている現状に対しては，日常で取り組む活動の良さを運動会作品などで披露する実践の積み上げと検討が今後も求められる。

## 引用文献・参考文献

１）黒岩英子（1991)「幼児の短縄跳びの習得について」日本保育学会大会研究論文集（44）98-99
２）高田忠助（1986)「幼児の『短なわとび』の動作について:未経験の幼児をとうして」日本保育学会大会研究論文集（39）158-159
３）高田忠助（1990)「『短なわとび』ができない幼児についての一考察：特にその動作をとうして」日本保育学会大会研究論文集（43）496-497
４）高田忠助（1991)「幼児の『短なわとび』の動作について：初めて経験する幼児の動作から」日本保育学会大会研究論文集（44）96-97
５）高田忠助（1988)「幼児の『短なわとび』の指導について：評価基準作成に関する一考察（２)」日本保育学会大会

研究論文集（41）318-319
６）三宅一郎（2002）「BGMが運動技能獲得時に及ぼす影響：縄跳び運動において」日本保育学会大会研究論文集（55）758-759
７）今井邦枝（2001）「幼児の運動指導における観察視点の検討（１）：縄跳びにおける動作様式の発達から」日本保育学会大会研究論文集（54）42-43
８）今井邦枝（2002）「幼児の運動指導における観察視点の検討（２）：縄跳びにおける動作様式の発達から」日本保育学会大会研究論文集（55）464-465
９）曽和光代（1993）「縄跳び遊びの一考察」親和女子大学児童教育学研究（12）A1-A18
10）平井博史（2018）「幼児期における縄跳びの効果的指導方法の研究」中部学院大学短期大学部教育実践研究３（２）11-18
11）三井登（2013）「幼児期の運動遊びにおける指導法の課題」帯広大谷短期大学紀要50（０）127-136
12）三輪佳見（2009）「幼児の長なわとびの動感促発分析」伝承９（０）73-88
13）都築繁幸（2017）「子どもの運動に対する小学校教師の意識」障害者教育・福祉学研究（13）107-116
14）吉田伊津美（2012）「幼稚園における運動指導の実態と教員の運動指導に対する意識：国公立幼稚園と私立幼稚園との比較」東京学芸大学紀要・総合教育科学系63（１）107-113